

## 編集後記

英文学や漢文学を専門として、永年本学で教鞭を執られた三人の先生方が、この三月を以て、折しも文学低迷のさなか、去つていかれる。

大学で文学を専攻する学生の漸減の兆しは既に昭和四十年代初めにあり、大学院でも昭和四十年代後半には文学系よりも言語系の方が就職率がよかつた。四十年代半ばまでには高度経済成長を遂げ昭和元禄などと浮かれ、精神的な豊かさよりも物質的な豊饒が求められた。飯の種にならない文学なんぞよりも実用性の高い言語学系の教育に目が向けられていつたのは、自然の流れである。

理系でも実用とは直接には結びつかない基礎研究が科学の土台となつてその発展を支へてゐるやうに、夏・戸冬・扇の如き文学は、人の精神をその根柢から養ひ育てる働きを持つ。御三方は本学において専門を通して、そのやうな人間の基礎教育を担つてこられた。ここに寄せられた数々の論文は、御三方の新たな旅路の始まりに手向け撒かれた幣である。

(一)

平成二十一年二月十九日 印刷  
平成二十一年二月二十日 発行

編者 愛知大学文学會  
代表者 交野正芳

印刷所 豊橋市東森岡  
株式会社 三愛企画

発行所 豊橋市町畑町  
愛知大学文学會  
振替〇〇八三〇一—四五六五四